

土田 昇著

### 瀏瀏と研ぐ

職人と芸術家

口絵に著者・土田昇が研いだ鑿の画像がある。それは、寒気がするほど清らかな月光が広がる風景のようである。私は、時間と所作が刻まれたその存在感から目が離せなくなった。

土田は、木工手道具全般の目立て、研ぎ、すげ込み等を行う技術者である。本書は著者の鍛冶場風景からはじまり、「木工手道具によってつながる職人と芸術家たち」が職人の視点から語られていく。次第に物語は、彫刻家・高村光太郎が依頼し道具鍛冶の名工・千代鶴是秀が制作したとされる一本の彫刻刀へとフォーカスしていく。この彫刻刀の素材は玉鋼ではないか、なぜ共柄のアイスキリなのかと、著者にし

の手と意識が、鉄・火・石と接するときのイメージは、この「感触」という言葉以外では表現しえないだろう。

土田は、鈴木実や岩野亮介の彫刻を「美しく実用性が低いものだけが引き起こす不思議」と表現する。芸術の面白さのひとつに、技術的な上手下

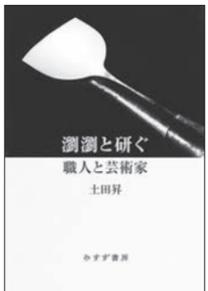
という。芸術の新規性は、既存の概念を乗り越え、積と作業感の不思議に見出す。理解不能な感



## 職人の視点と「道具」から照射する

### 日本美術史に埋もれてしまった「芸術の戦争責任」

知足 美加子



四六判・304頁・4620円  
みすず書房  
978-4-622-09699-3  
TEL. 03-3814-0131

手と、作品の良し悪しが必ずしも連動しないという点がある。上手すぎたピカソは、子供のよう描くために一生をかけた

人がとって、上手さは善であり使命だ。乗り越えらるべきは先人の技術であらう。この二つのベクトルが接する点を、土田は

高村光太郎と違い、千代鶴是秀は「刀は打たぬ」と軍刀を作らなかつた。「名刀は、その見事な鍛えを見ただけで世の中が収まるようなもの」と言いき、千代鶴の刃は人を殺さず、創造を支えた。その責任に對して真摯に向き合ってきたとは言い難く、私にとって高村光太郎は捉えどころのない人物の一人だった。

「道具」からみる平等性は、高村光太郎のある一面を鏡のように映し出す。著者の目は、光太郎の道具に関する造詣の深さを、制作時間の二・三割を研ぎに費やしたことを見抜く。そして父・光雲からの「技術相承の面影」と、染み入るような「孤独」を感得する。光太郎は、どのように抵抗

したとしても本質的に「職人」だったと推察される。父、智恵子、戦争さへも形而上的な美の中に固定してしまった高村光太郎。憶測だが、静寂と平安の中で道具と向きあう間は、彼自身のままで世界に触れていたのかもしれない。本タイトル「瀏瀏(りゅうりゅう)と研ぐ」は、高村光太郎の「鯨」という詩の中に登場するフレーズである。宗時代の詩人・謝惠連が、湖に映る月を眺め、吹きぬける清らかな風を「瀏瀏」と表現したことを受けたと考えられる(亭亭映江月、瀏瀏出谷瀾)。水にうつる月光、孤独、晴明な風の風景は、どこか土田が研いだ鑿の刃裏の佇まいに似ている。(ともたり・みかこ)九州大学芸術工学研

究院教授・芸術学・彫刻 ★つちだ・のぼる(土田刃物店三代目店主。著書に『時間と刃物職人と手道具との対話』『職人の近代 道具鍛冶千代鶴是秀の変容』『刃物たる職人の昭和』など。一九六二年生。)